小学校入門期における「話すこと・聞くこと」の学習プログラムの作成

所属校：新宿区立東戸山小学校
氏　名：福　井　み　ど　り
派遣先：玉川大学教職大学院

キーワード：国語科「話すこと・聞くこと」・実生活で生きる・言葉と態度

Ⅰ　研究の目的

本研究では、言葉と態度の課題を幼児期の発達段階から捉え直し、小学校における国語科の「話し方」「聞き方」のスキルを高めるためには、どのように学習を設定し指導を行えばよいのかを検証する。そこで、主として、入門期の国語科において「話し方」「聞き方」の能力を高めるための学習指導法に焦点を当てて追究する。

Ⅱ　研究の方法

（１）研究期間

平成 22 年４月～平成 22 年６月
　研究主題の検討・研究計画立案
平成 22 年６月～平成 22 年 12 月
　先行文献による理論研究・先行事例研究
　アンケート調査・児童園児の実態観察
　所属校における検証授業・学習プログラム立案
平成 22 年 12 月～平成 23 年１月
　研究のまとめ　学習プログラム集の作成

（２）研究内容

①理論研究
　先行文献や先行研究により、乳幼児の言葉の習得に関する文献や、小学校入門期において言葉と態度の課題を解決するための「話すこと・聞くこと」に関する言語活動を研究した事例から学ぶ
②実態調査
　幼稚園の年長組園児と小学校１年生児童の実態を調査
③学習プログラム案
　研究・調査に基づいた学習プログラム案を作成
④検証授業の実施
　作成した学習プログラムによる授業を実施
⑤学習プログラム集
　検証授業の反省を踏まえた学習プログラム集の作成
⑥まとめ
　研究のまとめと今後の課題

Ⅲ　研究の結果

（１）理論研究より

先行文献、先行研究、実践研究から、「小学校入門期における『話すこと・聞くこと』の学習プログラム」を作成するにあたり、基本となる考え方を以下にまとめる。

〇幼児期の言語習得に関する先行文献より
　言葉の習得は関わりが重要であり、また、その関わりが意図的に行われることで、言語の習得につながっている。
〇中央教育審議会答申・新学習指導要領・新教科書より
　実生活で生きる言語力を育成し、それにより「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力」が育つような学習プログラムを作成する。
〇品川区「市民科」、世田谷区立奥沢小学校校内研究の実践研究より
・ 言葉と態度の課題を解決するための「話すこと・聞くこと」との関連単元は下学年で行い、特に、入学当初に集中して単元を組む。
・ 言葉と態度の課題を解決するための「話すこと・聞くこと」を、国語科の中で目標をしっかり押さえ指導する。
・ 教科書単元だけでない、実生活に生きる学習プログラムの特設単元を作る。
・ 学級、学校の中だけでなく、家庭や社会で生かせる学習プログラムを開発する。

（２）小学校入門期における実態調査と分析より

①幼稚園児と小学校１年生の発言の調査結果
・ 幼稚園児の段階では、関わりを求めようとする言葉よりも、自己表現としての独り言や奇声などが多く見られた。
・ １年生児童は、友達と関わろうとする言葉が増えてきている。
・ １年生児童は、賛成や反対、依頼、提案、主張など、自分の立場をはっきりさせた言葉の表現が多くみられた。
②教師による小学校１年生の指導についてのアンケート調査結果

今回取り上げた 20 例の指導内容は殆どの教師が「必要な指導である」と答えた。しかし、必要だと分かっていても、取り組むことができず指導の効果が深められない指導内容もあることが分かった。

また、12 例の指導の工夫についても殆どの教師が「有効だと思う」と答えていた。

このことから、今回取り上げた 20 例の指導内容を取り組み易くするための学習プログラムを開発することが必要だと感じた。更に、指導内容の中に、これまでの先行研究で有効だと言われてきた指導の工夫を取り上げて行うことで、より効果的な学習プログラムの作成が期待できる。

（３）入門期における「話すこと・聞くこと」学習プログラム作成の視点

理論研究、実態調査結果を受け、学習プログラムの作成の視点を以下にまとめる。

- 意図的な関わりの中で良き言葉と態度を習得できる学習プログラムであること
- 入門期の１年生で行う学習プログラムであること
- 国語科のめあてにあった学習プログラムであること
- 個に応じた支援の工夫を生かした学習プログラムであること
- 実生活に生かすことのできる学習プログラムであること

（４）学習プログラム案

以下が研究の結果作成した学習プログラムである。

月	単元名
４月	きもちのよい「あいさつ」をしよう
	じょうずに「自己紹介」をしよう
	忘れ物をしないために・忘れ物をしてしまったら（学習準備）
	「ぐーぺたぴんさ」「はい（立つ）です」（授業中の姿勢・態度・発言）
	じょうずな　おはなしの　ききかたを　しろう
	じょうずな　はなしかたを　しろう
５月	わけを話そう　（理由の述べ方）
	楽しく美味しく「いただきます」（食事のマナー）
	上手な「ごめんなさい」　（お詫びの仕方）
	上手な「ありがとう」　（感謝の仕方）
	仲良く遊ぼう（休み時間を楽しく過ごすために）
６月	朝の会・帰りの会をしよう
９月	みんなでピカピカ！（協力して掃除しよう）
10 月	みんなで話し合おう！（話し合いの仕方）
11 月	「（トントン）失礼します」（入室のマナー）
１月	スピーチをしよう
	お友だちとケンカしちゃった・・・（トラブルへの対応）
２月	きちんと伝えよう（用件の伝え方）
	ていねいな言葉遣い、できるかな？

（５）学習プログラムの基本的展開の仕方

本学習プログラムの基本的な展開として、以下の３点を挙げたい。

①ねらいを明確にすること　～１時間で習得しなければならない事柄を明確に示す～

②学習の方法を明確に提示すること　～この時間で行う学習をしっかり示す～

③定着を図るために学びの過程をパターン化すること　～基本スタイル～

（６）学習プログラム活用の工夫点

本学習プログラムにおいて活用の工夫を以下に挙げる。これは、理論研究や先行研究から分かったことをもとに挙げた。

①実生活に基づいた学習の場の設定

②本物から学ぶ機会や、体験から学べる場の設定

③繰り返し指導することを取り入れた場の設定

④個と集団との関わり方やルールを学ぶ場の設定

⑤学校で学習したことが家庭や社会で生きる場の設定

⑥定着を図るために、学びの過程（プロセス）をパターン化

⑦場に応じた話し方・聞き方に関する手引きを作成

⑧集団生活を営む上で必ず守るべきルールを明確に提示

⑨ＩＣＴの活用（ロールプレイングのＶＴＲ、クローズアップや情報を共有するための実物投影機等）

⑩グループ対話等の学習形態の取り入れ

⑪教師や児童によるロールプレイングの取り入れ

Ⅳ　本研究の成果と課題

「入門期における『話すこと・聞くこと』の学習プログラム」を作成し実行した中で、その成果と課題を挙げる。

＜成果＞

○　児童の変容がすぐに現れる

○　１時間の中で達成できる学習プログラム

○　ゲストティーチャーの活用が有効

＜課題＞

○　継続していくための工夫が必要

○　実生活での変容をみとりたい

○　担任一人で行うことに限界がある

これらの改善を図り、新たな学習プログラム集を作成する。